

高等学校における異文化理解学習（1）

—大航海時代の日本を事例として—

地歴・公民科 高橋 健 司

はじめに

高校生にとって異文化理解とは、小学校や中学校での学習を通して、「知らない国の文化を理解すること」というのが定着している。しかし、そこには省みて自らの文化・価値観を客観視し相対化する姿勢はほとんど見られない。これでは「異文化共生能力の育成」には程遠いのではないだろうか。

そこで本論では、現代社会の授業実践を通して必要と思われる異文化理解学習の課題について触れ、また具体的な授業展開を示したい。

1 価値観の違いの「発見」

まず最初に挙げたいのは、授業において価値観の違いを「発見」することの必要性である。

本校の2年生に対して、「この度、アメリカで『子どものための博物館』が建設されることになりました。その中で『日本の文化と社会』というコーナーが設置されるのですが、あなたがプランナー（計画者・企画者）なら、どのような展示にしますか。そのデザインをイラストを用いてわかりやすく表現して下さい。」という質問をしたところ、資料1の図1、2のようなものが大部分を占めた。ほとんどの生徒にとって、「異文化」という言葉のイメージは、「寿司、相撲、富士山」といったステレオタイプ的な「珍しいもの」であることがよくわかる。

これに対して外国生活の経験のある生徒が描いたのが、図3のルーズ・ソックスや携帯電話といった、ありふれた高校生自身の身の回りにあるものである。「外からの視点」で見れば、それらがいかに「奇異」なものに映っているかがわかる。

このように、異文化体験の少ない大部分の高校生にとっては、毎日目にするものは「当たり前」に映り、日常生活習慣に埋没しがちである。

実は、この質問に対しては一つの答えが用意されている。資料2は、アメリカのボストンにあるザ・チルドレンズ・ミュージアムの展示風景の写真である。この博物館は子どものための博物館としては草分け的存在で、私が実際に訪れた1998年には、日本の文化と社会の紹

介のコーナーに、ガラスのケースに納められた幼稚園の制服や、キャラクター・グッズの山、そして多種多様な商品が取り出せる自動販売機、日本の観光地でよく目にする顔の部分に穴が空いたセーラー服の写真パネルなど、いずれも私たちにとっては日常の「ありふれたもの」が展示されていた。

このような展示に対し、私は新鮮な驚きを禁じ得なかった。私もまたステレオタイプの異文化像を予想していたからである。そして「外からの視点」で見れば、生活の中の何気ない部分に、大きな価値観の違いが潜んでいることに気づかされたといえる。

こうした体験に基づき、異文化と比較することによって、文化的背景が異なれば「常識」もまた異なるという、価値観の違いの「発見」が、学習の最初の段階で必要であると考えた。

2 エスノセントリズムの「克服」

次に挙げたいのが、エスノセントリズムの「克服」の姿勢を身に付けさせることである。

「共生」という言葉は今や至る所で目にするが、「異文化の共生」は、現実世界を見ればいかに困難なものであるかは容易に想像できる。それを歌い文句だけで片づけないためには、異なる価値観の対立から生じる文化摩擦、特にエスノセントリズム（自民族中心主義）の問題をしっかりと把握していく必要がある。

しかし、それは解決不可能な問題として高校生に認識させるのではなく、問題と取り組もうとする意識や態度を育成していかなければならない。そのためには、実際に問題の「克服」に取り組む姿を教材として提示することが有効ではないだろうか。

そこで注目したのが、16世紀後半の安土・桃山時代、初めて日本にやって来たヨーロッパ人であるバテレン（宣教師）たちである。

バテレンといえばフランシスコ・ザビエルがあまりに有名で、「聖人」としての印象は強烈である。しかし、その一方で同時代の中南米に目を向ければ、「異教徒の改宗」の名の下に、どのような残酷な行為をも正当化できる「キリスト教徒」としての一種の選民意識が、当時

のヨーロッパ人宣教師の中に見られるのもまた事実である。

実際、ザビエル以降の来日したヨーロッパ人宣教師を見れば、日本人を「野蛮人」としか見られないパテレンも存在し、それによって文化摩擦が生じている。ところが、反対に選民意識を克服して異文化と接しようとするパテレンも存在して、彼らの遺した記録は多くの示唆に富んでいる。

従来の歴史研究では、パテレンたちの布教・教義内容にばかり目が向けられてきたが、外国人として日本という異文化に対してどのように接したか、その人間的側面を知ろうとすることは、単に歴史的過去を知るのではなく、歴史的アナロジー（類推物）として現代的な意義があると考える。

こうしたパテレンたちの心の葛藤を授業において追体験することによって、エスノセントリズムを取り上げることが可能ではないかと考えた。

3 異文化の「受容と変容」

そして最後に挙げたいのが、異文化の「受容と変容」の具体的なイメージを想起できるようにすることである。

高校生にとって異文化に対するイメージは、自文化の対局にあるもの、という感じが強い。

しかし、本来異文化と自文化などと単純に二分することの方が無理があるのかもしれない。すなわち、歴史を振り返れば明らかのように、外来文化を取り入れることによって、日本独自の文化が形成されてきたといえるからである。

それゆえ、異文化と接触し「受容」することによって、自文化がより豊かなものになっていくというイメージを授業で喚起する必要があるのではないだろうか。

もちろん、植民地支配など他民族によって異文化が「強制」された地域においては、単純に「豊かになった」などとは言えないが、深刻な民族対立など世界的な異文化の排除が実行されている現代だからこそ、異文化の「受容」によって自文化が活性化するという、ポジティブな側面を強調したいと考える。

また、「受容」とは「異質なもの」の「丸飲み」ではなく、自文化に合わせてアレンジされていること、すなわち「変容」が生じていることにも留意しなければならない。さらに、こうした異文化の接触に伴う「受容と変容」が、一方通行的なものではなく、双方向的なものであることにも配慮が必要である。

そこで注目したのが南蛮文化である。特に金平糖など南蛮菓子は、すっかり日本文化の中に定着しており、その由来を見落としてしまうぐらいである。また、天正遣欧使節によって日本に持ち帰られた活版印刷機で初めて紹介された『伊曾保物語』は、原作のイソップ物語と似て非なるもので文化変容の典型と言える。そして反対に、同時代のヨーロッパに日本が与えた文化的な影響として、茶を取り上げようと考えた。

4 授業展開の実際

以上の三点を踏まえて、計画し実践したのが次の表1の学習指導計画「未知との遭遇—日本と西洋の出会い—」である。

表1 学習指導計画「未知との遭遇—日本と西洋の出会い—」

曜	学習内容	学習活動	指導上の留意点・資料
1	日米の生活の中の価値観の違い	アメリカ・ボストンにあるザ・チルドレンズ・ミュージアムの日本文化の展示写真をもとに、日本人にとっては日常のありふれたものを、なぜアメリカ人が展示しているのかを考える。 【写真例】 ・ケースに入れられた幼稚園の制服 ・多種多様なキャラクターグッズ ・コカコーラの自動販売機 など	【写真配布】（資料2） 文化の違いとは特別な行事や習慣だけでなく、身の回りのありふれた場面でも多数存在していることに気付かせる。 また、文化が異なれば「当たり前」のことが「常識」ではなくなり、そこには民族によって価値観の違いが存在することにも注意する。
2	400年前のカルチャー・ショック	大航海時代に初めて日本にやって来たヨーロッパ人の一人である、イエズス会宣教師ルイス＝フロイスが遺した『日欧文化比較』をもとに、日本人とヨーロッパ人の価値観の違いについて知り、それがいかに大きな	【プリント配布】（資料3） 異文化と接したパテレンたちにとって、「何が正しいか」とか「何が美しいか」といった根本的な価値基準すら絶対的なものではなくなった、という事実をもとに、世界には多様

		カルチャー・ショックを引き起こしたか想像する。 【質問例】 ・日本では、なぜ墮胎や間引きが頻繁に行なわれるのか。 など	な文化の形態が存在し、私たちの文化は、その中の一形態であるという文化に対する相対的な見方を養えるように留意する。
3	「日本人は“野蛮人”か」 ーバテレン論争ー	大きなカルチャー・ショックを受けたバテレンたちにとって、日本と日本人に対する見解は人様々であり、「日本人は野蛮人」と見なし嫌悪する布教長カブラルと、「日本人ほど賢明な国民はいない」とするオルガンティーノの対立をもとに、ヨーロッパ中心のエスノセントリズム（自民族中心主義）について知る。 また、特にヨーロッパ人を困惑させた日本人の「あいまいさ」について通訳ロドリゲスの資料から考える。	【プリント配布】（資料4） カブラルに見られるような、価値観の違いに起因する混乱が、エスノセントリズムと結びついて、異文化に対し排他的な態度を生み出すことの危険性に注意する。 また、これに関連して、「南蛮」という言葉の本来の意味を中国人の中華思想に求めたり、同時代のヨーロッパ人の南米における文化破壊や非人間的行為についても触れ、エスノセントリズムの問題点を指摘する。
4	「我らは彼らの国に住んでいる」 ー巡察使ヴァリニャーノの見た日本ー	民族的差別と偏見を持ったカブラルの方針で布教していたイエズス会の活動を、視察に来たヴァリニャーノの目を通して批判的に捉え、さらにヴァリニャーノが、日本人とヨーロッパ人の間の民族対立と文化摩擦をなくすために、いかに異文化を受け入れようとしたかを知る。	エスノセントリズムが解決不能なものという認識を固定化してしまわないために、異文化に対して公正な視点と態度で接することができたヴァリニャーノを例に、困難を伴いながらもそれを克服しようとする姿勢に注目する。
5	初めての文化交流 ー天正少年使節の見たヨーロッパー	ヴァリニャーノの企画で、初めてヨーロッパに渡った使節の4人の少年についてVTRとプリントをもとに知り、ヨーロッパから帰国後、棄教し弾圧する側に回った千々石ミゲルと、禁教後も日本に留まり殉教した中浦ジュリアンとの対比をもとに、その原因について意見を出し合う。	【VTR「堂々日本史」上映】 【プリント配布】（資料5） 異文化体験が個人にどのような影響をもたらしたのか、またそこに個人差が生じたのはなぜなのかなど、異文化世界を生き来した少年たちの生き方に対し、共感的に捉えられるよう注意する。
6	天正少年使節のヨーロッパみやげ ー「アリとキリギリス」の400年ー	天正少年使節が持ち帰った活字印刷機によって、初めて紹介されたヨーロッパの物語が『イソップ』物語であることに触れ、その中でも特に日本人に親しまれてきた「アリとキリギリス」の話を取り上げて、なぜ原作と日本語訳とは、話の結末が正反対になってしまっているのか、について話し合う。	【童話『イソップ物語』紹介】 【プリント配布】（資料6） 異文化を受容するとは、そのままの形ではなく、自国の文化に合わせてアレンジしたものが受け入れられていること、すなわち文化変容が生じることを理解させ、「アリとキリギリス」以外にも同様な例がないか、身近な場面に目を向けさせる。
7	身近な南蛮文化 ー金平糖とコンフェイトスー	日本の伝統的文化と言われるものの中にも、外来文化が溶け込んでいることを、金平糖をはじめとする南蛮菓子を例に理解する。 また、普段何気なく用いている言葉の中にも、カップ、ポタン、シャボンなど、ポルトガル語起源のものが多数あることを知る。	【金平糖の配布・試食】 【プリント配布】（資料7、8） 文化変容を具体的なイメージで捉えさせ、異文化との出会いが、新しい文化を生み出す契機となり、それによって自文化が活性化するという、異文化を肯定的にとらえる視点を喚起する。
8	バテレンがヨーロッパに知らしめたもの ー緑茶文化と紅茶文化ー	前時とは反対に、バテレンたちの茶の湯文化に対する驚きが、日本茶のヨーロッパ向け輸出の契機となり、やがてイギリスでは独自の紅茶文化を築くに至るまでを知り、日本の緑茶文化との文化比較を行なう。	【緑茶と紅茶の比較実験】 【プリント配布】（資料9、10） 異文化と接触するということは、一方が他方にのみ影響を与えるのではなく、双方にとって大きな刺激となるということ、反対の立場からも捉えさせる。

大きな流れとして、「異文化と出会って、価値観の違いを認め合い、エスノセントリズムに基づく文化摩擦を克服し、互いの文化を受け入れることによって、彩り豊かな文化が形成されていく」姿を描こうとした。

具体的な教材としては、パテレンと南蛮文化に関するものが中心だが、導入部分として最初に触れた資料2のボストンのザ・チルドレンズ・ミュージアムの写真を実際に用いた。

また、資料3から資料10の配布プリントは、史料的价值だけではなく、出来るだけ視覚に訴えるように漫画なども取り入れ、他にも映像資料や南蛮菓子の実物などを用いた。

おわりに

このような授業を通して、最初に挙げた課題をどれだけ達成できたか、まだ十分に評価ができていないが、今後エスノセントリズムの問題は、より一層考慮しなければならぬと感じている。

また、今度は日本人自身がエスノセントリズムに対し、どのように向かい合えるのかを中心に、授業に取り組んでみたいと考えている。

参考・引用文献

- ルイス・フロイス 『ヨーロッパ文化と日本文化 岩波文庫青459-1』 (岩波書店1991)
- ルイス・フロイス 『日本史3 キリシタン伝来のころ 東洋文庫65』 (平凡社1966)
- ヴァリニャーノ 『日本巡察記 東洋文庫229』 (平凡社1973)
- ジョアン・ロドリゲス 『日本教会史 上 大航海時代叢書第1期9』 (岩波書店1967)
- マイケル・クーバー 『通辞ロドリゲス 南蛮の冒険者と大航海時代の日本・中国』 (原書房1991)
- 松田毅一 『南蛮史料の発見 よみがえる信長時代 中公新書51』 (中央公論社1964)
- 松田毅一、川崎桃太 『回想の織田信長 フロイス「日本史」より 中公新書328』 (中央公論社1973)
- 松田毅一 『西洋との出会い 南蛮太閤記 上・下』 (大阪書籍1982)
- 松田毅一、E・ヨリッセン 『フロイスの日本覚書 日本とヨーロッパの風習の違い 中公新書707』 (中央公論社)
- 松田毅一 『天正遣欧使節』 (朝文社1991)
- 松田毅一 『ヴァリニャーノとキリシタン宗門』 (朝文社1992)
- 松田毅一 『新装・普及版 南蛮のパテレン』 (朝文社1993)
- 松田毅一監修 『日本の南蛮文化』 (淡交社1993)
- 高野悦子、伊藤玄二郎編 『図説ポルトガル』 (河出書房新社1993)
- 荒尾美代 『南蛮バイ・ネト料理の不思議探検』 (日本テレビ1992)
- 雁屋哲・作、花咲アキラ・画 『美味しんぼ47』 (小学館1994)
- NHK 取材班編 『豪華! 戦国の南蛮ファッション』 『堂々日本史 第11巻』 (KTC中央出版1998)
- NHK 取材班編 『ローマを見た少年たち/ 天正遣欧使節の栄光と悲劇』 『堂々日本史 第17巻』 (KTC 中央出版1998)
- セゾン美術館、静岡県立美術館編 『ポルトガルと南蛮文化展・図録』 (日本放送協会1993)
- 茨城県立歴史館編 『神戸市立博物館所蔵名品展・図録 南蛮美術と洋風画』 (茨城県立歴史館1995)
- 東武美術館、朝日新聞社編 『大ザビエル展・図録』 (東武美術館、朝日新聞社1999)
- 坂本満 『興味津々南蛮ワールド』 『芸術新潮1999年2月号』 (新潮社1999)
- GEO編集部 『特集 紅茶の正体』 『GEO1996年6月号』 (同朋社出版1996)
- 村井康彦 『茶の文化史 岩波新書89』 (岩波書店1979)
- 角山栄 『茶の世界史 緑茶の文化と紅茶の社会 中公新書596』 (中央公論社1980)
- 磯淵猛 『紅茶画廊へようこそ』 (扶桑社1996)
- 古田暁監修 『異文化コミュニケーション 有斐閣選書770』 (有斐閣1996)
- 黒木雅子 『異文化論への招待 「違い」からの自文化再発見』 (朱鷺書房1996)
- 小坂井敏晶 『異文化受容のパラドックス 朝日選書564』 (朝日新聞社1996)

【資料 1】

この度、アメリカで「子どものための博物館」が建設されることになりました。その中で「日本の文化と社会」というコーナーが設けられるのですが、あなたがプランナー（計画者・企画者）なら、どのような展示にしますか。そのデザインをイラストを用いてわかりやすく表現してください。

図 1

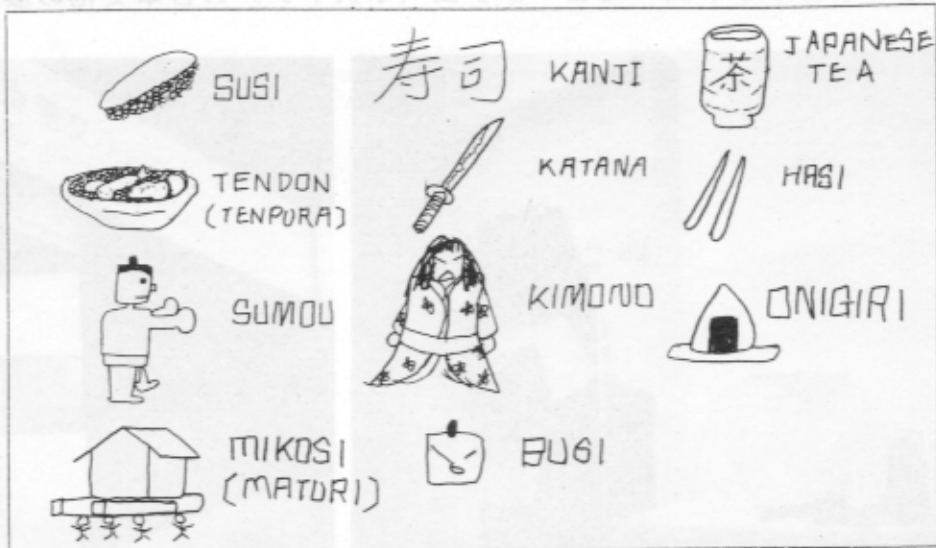


図 2

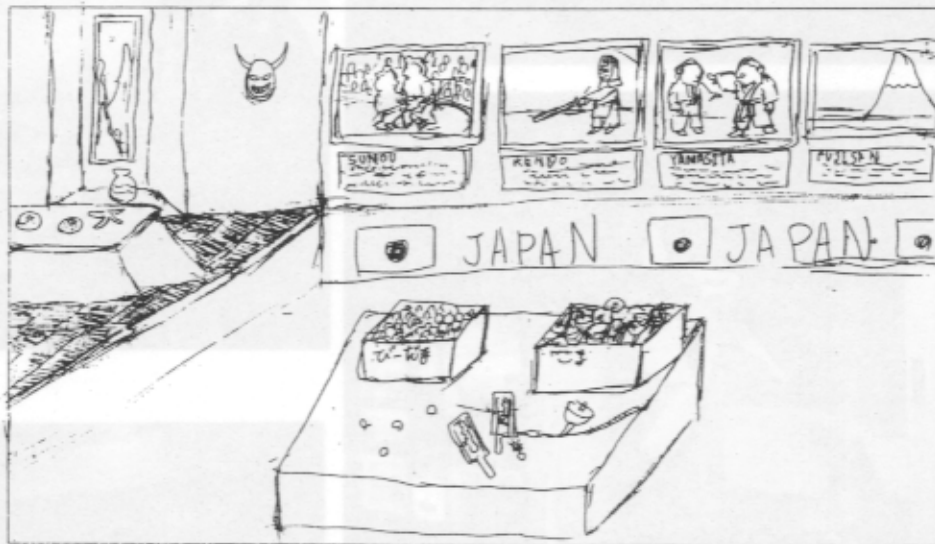
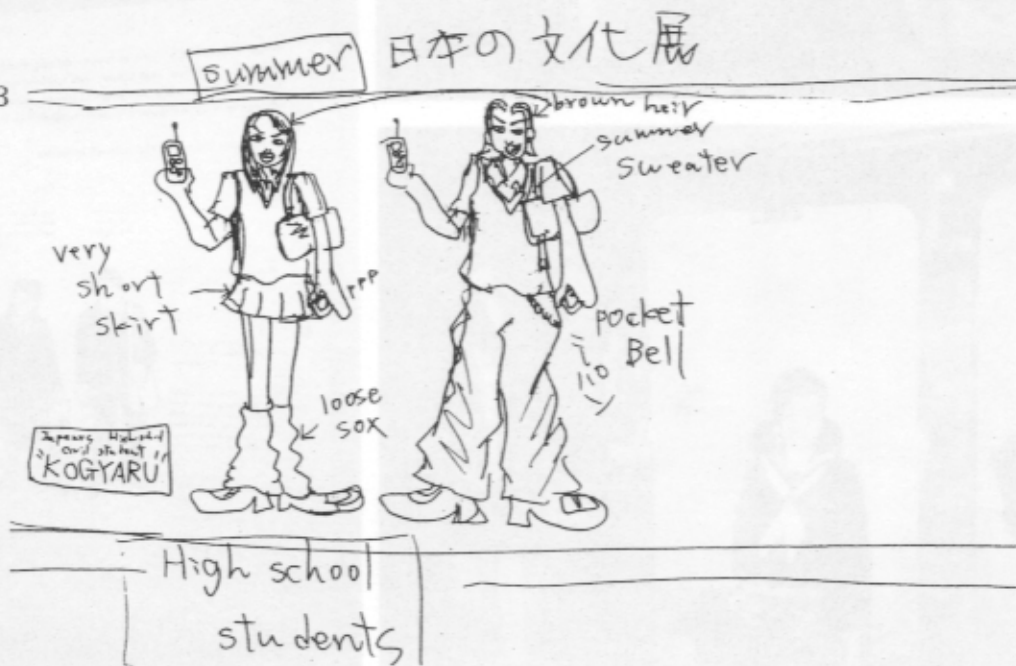
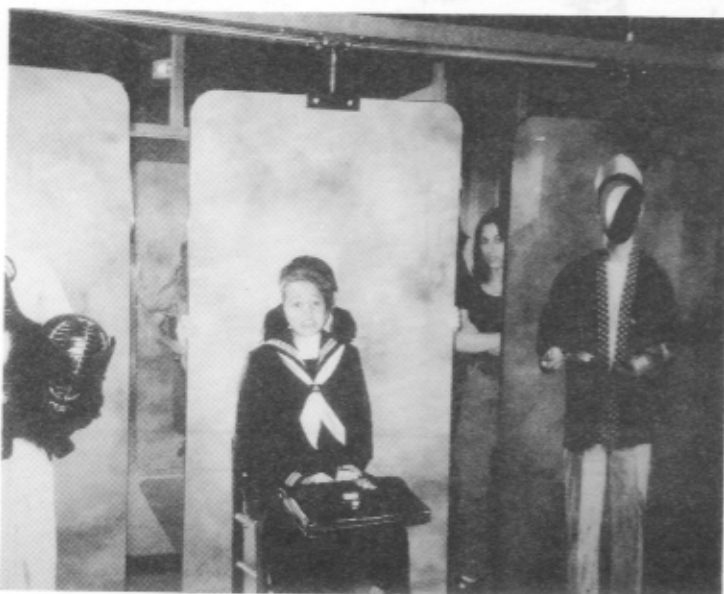
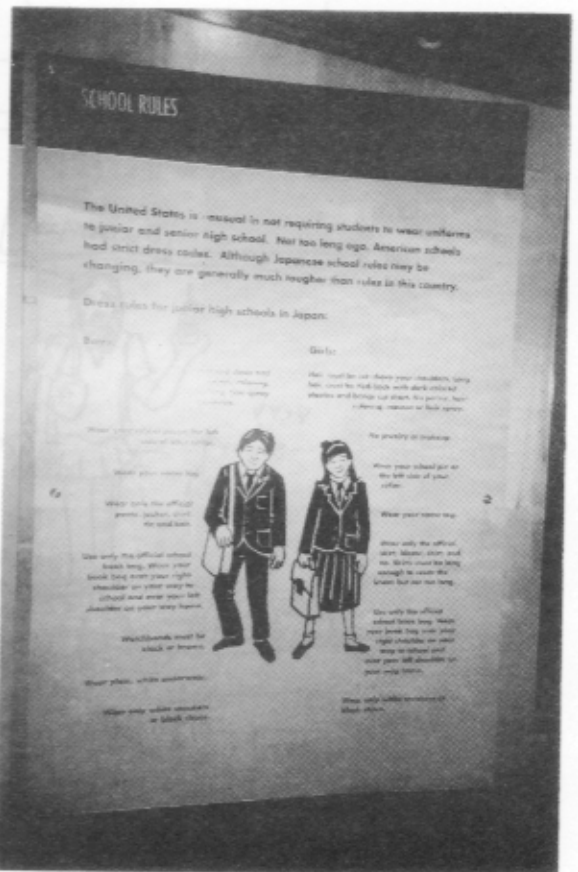


図 3

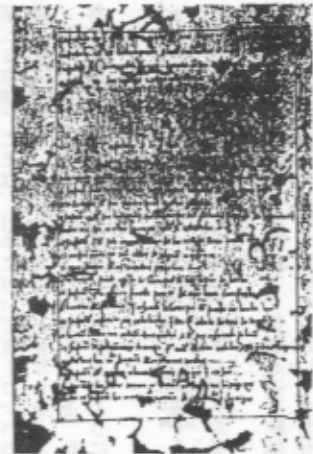


【資料2】ザ・チルドレンズ・ミュージアム（ボストン）の日本文化の展示風景





不思議の国「日本」 —ルイス・フロイスの見た日本—



「日欧文化比較論」
ルイス・フロイス著

—ヨーロッパでは未婚女性の最高の榮譽と財産は、貞操であり、純潔が重くないことである。日本の女性は処女の純潔をなんら重んじない。それを欠いても、榮譽も結婚（する資格）も失いはしない。

—ヨーロッパの婦人は金髪であることを誇り、そのために多くのことをする。日本の婦人はそれをきらい、髪を黒くするより、全力をつくす。

—ヨーロッパの婦人は、芳香のある香料で頭髪をおわせる。日本の婦人は、（頭髪に）塗った油でいつも悪臭を放つ。

—ヨーロッパの婦人は自宅で髪や顔を洗う。日本の婦人は公衆浴場で洗うが、そこには特別な髪の洗い場がある。

—ヨーロッパの婦人は、リっぱでととのった扇を誇りとする。日本の婦人はただの一本も残さぬようにすべて毛抜きで抜いてしまふ。

—ヨーロッパの婦人は短い年月で白髪となる。日本の婦人は六十歳になっても、油を塗っているために白髪にはならない。

—ヨーロッパの婦人は耳染に穴をあけ、それに耳飾りをはめ込む。日本の婦人は耳染に穴をあけないし、どのような飾りもつけない。

—ヨーロッパの婦人のものでは、顔に化粧品や美顔料がよく見えるならば、不手際とみなされる。日本の婦人は白粉を塗れば塗るほどいっそう美しいとみなす。

—ヨーロッパの婦人は、宝石つきの指輪、その他の装身具を身につける。日本の婦人は、なら金銀製の装身具や宝物を用いない。

—ヨーロッパでは夫婦の間で財産は共有である。日本ではおのおのが自分のわけまえを所有しており、ときどき、妻が夫に高利で貸しつける。

—ヨーロッパでは、妻を離別することは、それが罪悪であることはともかく、最大の不名誉である。日本では望みのまま幾人でも離別する。彼女たちはそれによって名誉も結婚（する資格）も失わない。

—（ヨーロッパでは）墮落した本性にもとづいて、妻を離別するのは男たちである。日本ではしばしば夫を離別するのは妻たちである。

—ヨーロッパでは、親族のひとりか誘拐されても、一族全部が死の危険に身をさらす。日本では、父母兄弟がそれを黙し、隠したりする。

—ヨーロッパでは、娘や処女を（俗世から）隔離することは、はなはだ大問題であり嚴重である。日本では、娘たちは両親と相談することもなく、一日でも、また幾日でも、ひとりで行きたいところに行く。

—ヨーロッパでは、妻は夫の許可なしに家から外出しない。日本の婦人は、夫に知らさず、自由に行きたいところに行く。

—ヨーロッパでは、望胎は、行なわれはするがめつたにない。日本ではいともふつうのことである。二十回も望ろした女性がいるほどである。

—ヨーロッパでは嬰兒が生まれたのに殺されることはめつたにないか、またはほとんどめつたにない。日本の婦人たちは育てることができないと思うと、嬰兒の首筋に足をのせて、すべて殺してしまう。

—ヨーロッパでは妊婦は胎児をいためないように帯を緩める。日本の婦人は出産まで、帯と肉体との間に手を入れることができないくらい、きつく引き締める。

—ヨーロッパでは、婦人は出産後は横臥して休息する。日本の婦人は、出産後は二十日間、昼も夜も座していなければならない。

—ヨーロッパでは、修道女の修道生活、および（世俗からの）隔離は嚴重、かつ厳正である。日本では比丘尼の僧院は、ほとんど娼婦街となっている。

—われらのものでは、婦人が文字を書く心得はあまり普及していない。日本の貴婦人のものでは、もしそれを知っていなければ卑しまれる。

—われらのものでは、婦人あての書状においては、それをしたためる男性は署名する。日本では、婦人あての書状には署名すべきではない。また彼女ら自身、自分の書状には署名せぬばかりか、年月も記さない。

—ヨーロッパの女性は、女乗りの大鞍、もしくは腰掛けで騎行する。日本の女性は男子と同様に騎行する。

—ヨーロッパでは、通常は婦人が食事をつくる。日本ではそれを男性が行ない、そして貴人は台所で料理をつくることをりっぱなこととみなしている。

—ヨーロッパでは、男性が仕立屋である。ところで日本では女性がそうである。

—ヨーロッパでは婦人が葡萄酒を飲むならば非礼なこととされている。日本では非常に頻繁に行なわれ、祭りにさいしては彼女らはたびたび醗酵するまで飲む。

—ヨーロッパの婦人はたいがい肉や魚を食べる。日本の貴婦人は通常、肉を食べないし、多くの人は魚を食べない。

—ヨーロッパの貴婦人は、自分と話をしに来た人と隠れることなく語らう。日本の貴婦人は、それらの人たちが熟知のものでなければ屏風、または障子のうしろから話をする。

—ヨーロッパでは、婦人は死ぬまで頭髪を保つ。日本では老婦人と若婦になつたものは、喪と悲哀（の徴し）にかえて頭髪を剃る。

—われらのものでは、婦人たちは右手に水のコップをとって、その手で飲む。日本の女性は酒の盃を左手でとり、そして右手で飲む。



バテレンの見た日本

日本人は野蛮人

イエズス会日本布教長カプラルの手紙より

私は日本人ほど傲慢(ごうまん)、貪欲(どんよく)、不安定で偽装的な国民を見たことがない。彼らが共同の、そして従順な生活ができるとすれば、それは他になんらの生活手段がない場合においてのみである。ひとたび生計が成り立つようになると、たちまち彼らはまるで主人のように振る舞う。

日本人のもとでは、誰にも胸中を打ち明けず読み取れぬようにすることは名譽なこと、賢明なことと見なされている。彼らは子供の時からそのように奨励され、打ち明けず、偽善的であるように教育されるのである。

日本人修道士は、ヨーロッパ人と同じ知識を持つようになると、何をやるであろうか。彼らはひとたび教養を深く知るならば、教師を眼中に置くことなく独立するのである。

日本人は悪徳にふけており、かつまたそのように育てられているので、それから守るためには神の御恵みに頼るほかはない。

聡明な日本人

イエズス会上方担当オルガンティノの手紙より

日本人は、全世界でもっとも賢明な国民に属しており、彼らは喜んで理性に従うので、我ら一同よりはるかに優れている。我らの主なる神が何を人類に伝え給うたかを見たと思う者は、日本へ来さえすればよい。

彼らと交際する方法を知っている者は、彼らを自分の思い通りに動かすことができる。それに反し、彼らを正しく把握する方法がわからぬ者は大いに困惑するのである。

この国民には、怒りを外に現すことは極度に嫌われる。彼らはそのような人を「キミジカイ」、すなわち我らの言葉で小心者と呼ぶ。理性に基づいて行動せぬ者を、彼らは馬鹿者と見なし、日本語で「スマヌヒト」と稱する。

都(京都)こそは、日本においてヨーロッパのローマに当たり、科学、見識、文明は高尚である。願わくは彼らを野蛮人と見なし給うことなかれ。信仰のことはともかくとして、我らは彼らより顯著に劣っているのである。私は日本語を理解し始めてより、かくも世界的に聡明で明敏な人々はない、と考えるようになった。

つかみどころのない日本人

イエズス会通辞(つうじ)通訳)ロドリゲスの手紙より

日本人は生まれつき大変謙遜で、見たところ静かなので、親父たちはつい夢中になってしましますが、彼らの本心を見破ることはできません。なるほどヨーロッパ人ほど感情は激しくありません。しかしヨーロッパ人ほど徳を修める力はないのです。何も私はこの点で日本人を批判したりけなしたりするわけではなく、会のためを思えばこそあえて進言する次第です。

我らは彼らの国に住んでいる

イエズス会巡察使ヴァリニャーノの記録より

カプラルは、日本人を「黒人で低級な国民」と呼び、他の侮蔑的な表現を用いた。彼はしばしば彼らに向かい、「結局のところ、お前達は日本人である」と言うのが常で、彼らに對し、彼らが願った低級な人間であることを理解させようとした。かかる態度を日本人がいかに嫌悪したかは理解できることである。

また、日本人修道士は、ポルトガル人修道士とまったく異なっており、取り扱われ、このような待遇が彼らと我らとの間に不一致を招いたのは当然のことである。カプラルは「日本人を我らの習慣に、そしてポルトガル人を彼らの習慣に順応させるべきではない」とした。彼によれば「彼らは黒人であり、まったく野蛮な風習を持っている」というのである。彼はその後も日本の風習に順応せず、修道院内で高い机で食事し、テーブル布やナプキンを使用させた。彼は日本の風習を常に親しめぬものとし、これを悪しざまに言った。

このような願った方針は、日本人にひどい不満の念を持たせ、宣教師たちに対して愛情を抱かなくなった。そしてイエズス会に入会しようとする者はなくなった。

ヨーロッパ人宣教師たちが、「自分たちヨーロッパ人は異なった風習の中で育つたのだから、日本の礼法を知らないのも止むを得ないと考えていた」と願った時に、日本人からは次のような答がもどつて来た。

「そのことについては、あなた方に同情するし、一年や二年なら我慢するが、幾年も経っているのであるから我慢できない。なぜなら、あなた方が日本の風習や礼儀を覚えなさい、それを覚えようとしなさい。それがあなた方の気に入らないからである。それは私たちに對する侮辱であり、道理にも反する。なぜなら、あなた方が日本に来て、その数も少ない以上は、日本の風習に従うべきであり、私たちは日本の礼法をやめることはできないし、あなた方の風習に従うべきでもない。あるいはまた、あなた方が日本の風習を覚えなさい、知力と能力が欠けているためであるならば、日本人はそれほど無能なあなた方の教えを受けたり、あなた方を師とすべきではない。」

日本人とヨーロッパ人修道士は、それぞれ同列にあるべきである。両グループの融和の最大の妨げとなつて居るのは、日本人とヨーロッパ人の習慣がまったく相違していることである。我らにとつて礼節にかなない、よい教育、行儀、しつけと思われる多くのことが、日本人には感情を害することになる。だが我らは彼らの国に住んでいるのである。それゆえに我らは彼らの習慣に順応せねばならない。したがってヨーロッパ人宣教師は日本の礼法を学び、これに従うことが必要である。この国の習慣を悪く言つてはならない。我らは野蛮人とか無礼者と見なされないようにすべきである。



ヴァリニャーノの肖像

ヨーロッパを見た日本人

—天正少年使節—

【資料5】

天正少年使節と彼らの命運

ザビエルが伝えたキリスト教は、その後の時の権力者、織田信長の理解のもとに発展を遂げ、わずかな間に何万人もの信者を増やしていった。

やがて日本を訪れた巡察使アレフザンドロ・ヴァリニャーノは、キリシタン大名たちにローマへ使節を派遣することを提案した。

ヴァリニャーノが意図していたのは、日本の大名たちがローマ教皇に敬意を表することはもちろんのこと、ローマ教皇に謁見して日本の教会への援助を求め、ヨーロッパ人に日本を認識させること、そしてキリスト教が盛んであることを使節たちに肌で感じさせること、などであった。

そこで、九州のキリシタン大名である大友宗麟、有馬晴信、大村純忠らによって使節として選ばれたのが、伊東マンショ一三歳、千々石ミゲル一三歳、中浦ジュリアン一四歳、原マルチノ一三歳の四名であった。

こうして天正一〇年（一五八二）に四人の少年たちは長崎を出発した。

二年にわたる艱難辛苦の末にようやくポルトガルに着いた少年使節たちは、イエズス会のはからいでリスボンの教会や美しいシントラの城を訪れた。

【資料5】

そして、エヴォイラの大型堂でマンショとミゲルはパイオオルガンを弾いた。彼らはアラデルベを訪れ、国境を越えてスペインに入り、国王に謁見する。やがてスペインから海路を経て、一行はようやくローマ入りを果たす。日本を出発してから実に三年一か月後の天正一三年（一五八五）三月二日のことであった。

絢爛豪華な行列を従えバチカン宮殿に着いた一行を、教皇グレゴリオ一三世は「世界の最も遠い国から来た日本の使節」として最大級のもてなしをあたえた。

世俗は欲望と墮落、裏切りも殺人も横行する醜悪な世界である。しかし、ヴァリニャーノは少年たちに「見てはならないことを、見せないように」情報を操作し、それらをおぼろげに知らせ、選別してから少年たちにあたえた。



つまずき、少年たちは無邪気で無垢なままヨーロッパを美しきよきキリスト教会としてとらえてその任務を遂行したのである。

そして、日本を出発してから八年後の天正一八年（一五九〇）に祖国の地にもどった彼らを持っていたのは、長年の労苦をいたわることばでもなければ、華やかな歓迎の式典でもなかった。

すでに信長は亡く、後継者の豊臣秀吉はキリシタン禁門の禁止と宗教師の追放令を発していた。

その後、伊東マンショは長崎で病死し、原マルチノはマカオに追放され、中浦ジュリアンは宣々と殉教した。そして千々石ミゲルは棄教して行方不明になった。

みずからの意志とは無関係に、栄光と挫折の激しい運命を経験した彼らの人生にキリスト教が与えた影はどのようなものだったのだろうか。

Zeitschrift "Neue Welt" über die Japaner.



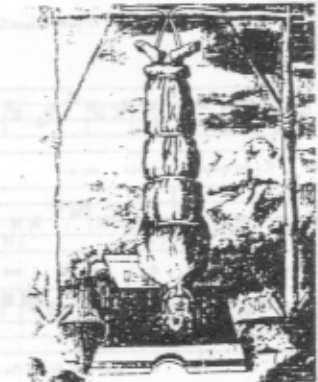
ドイツの新聞で紹介された使節一行（1586年）



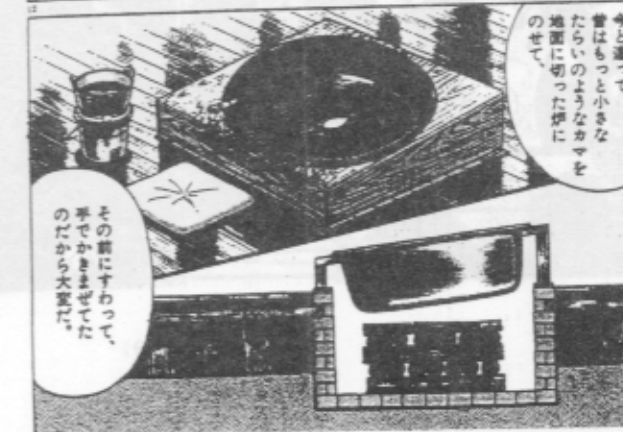
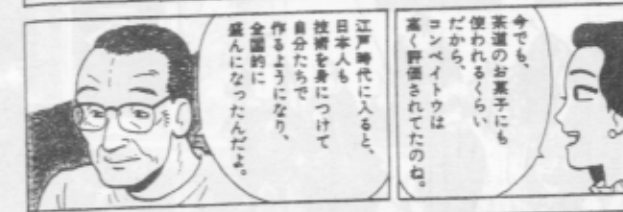
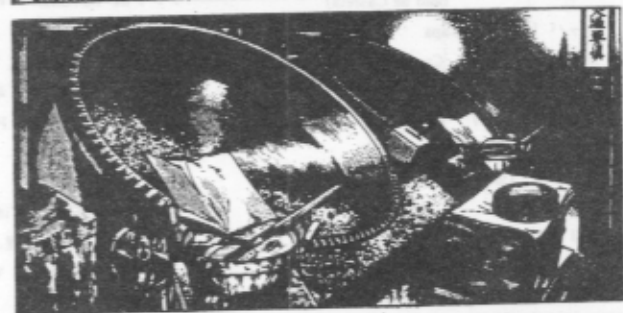
教皇グレゴリオ13世に謁見。ヴァチカン宮の帝王の間。中浦ジュリアンは病気のため単独謁見。



ヴェネツィア大統領宛感謝状。ヴェネツィアを去るにあたって、日本語にイタリア語訳文を添えて感謝。



中浦ジュリアンの殉教。天正遣欧使節のジュリアンは迫害下殉教を続けたが、ついに逆吊りで処刑。



【資料 8】

日本語になったポルトガル語

アマカハ珊瑚 Macau
 アメンドー (寿星桃) Amêndoa
 ウンスン・カルタ Um sumo de cartas
 オルガン Órgão
 カステラ [Clara em castelo,
 Bolo de Castela]

カッパ (合羽) Capa
 カナキン (金巾) Canequim
 カルサン (軽珍) Calção
 カルタ (歌留多) Carta
 カルメル (浮石糖) Caramelo
 カンテラ Candeia
 クルス Cruz
 キリシタン (吉利支丹、切支丹など)
 Cristão

コンペイ糖 (金米糖) Confeito
 ザボン (朱櫻・香櫻) Zambao
 サラサ (更紗) Saraca
 サントメ (棧留) São Tomé

ジバン (播磨) Gibão
 ジョロ (如雨露) [Jorro]
 タバコ (煙草) Tabaco
 タフタ Tafeta
 チャルメラ (哨呐) Charamela
 チンタ酒 (珍陀酒) Vinho tinto
 テンブラ (天竺羅)
 [Têmporas, Temperar, Tempero]
 バッテラ (端艇、さば寿司) Bateira
 バテレン (伴天連) Padre
 パン (麵包) Pão
 ヒカド Picado
 ビードロ (玻璃) Vidro
 ヒリュウズ (豆腐料理、飛竜頭) Filhós
 ビロード (天竺絨) Veludo
 フラスコ Frasco
 ベンガラ (弁柄、緋、檜子…) Bengala
 ボタン (鈕) Botão
 ボーブラ (南瓜) Abóbora

ボーロ Bolo
 ポント (カルタ用語、先斗)
 [Ponta, Ponte, Ponto]
 マルメロ (木瓜) Marmelo
 マント [Manto]
 メダイ Medalha
 メリヤス (莫大小) Meias
 モール (莫臥兒) Mogor, Mogol
 ラシャ (羅紗) Raxa
 ラセイタ (羅青板) Raxeta
 ランビキ (蘭引) Alambique
 ロザリオ Rosário
 ワカ (牛肉) Vaca [Carne de]

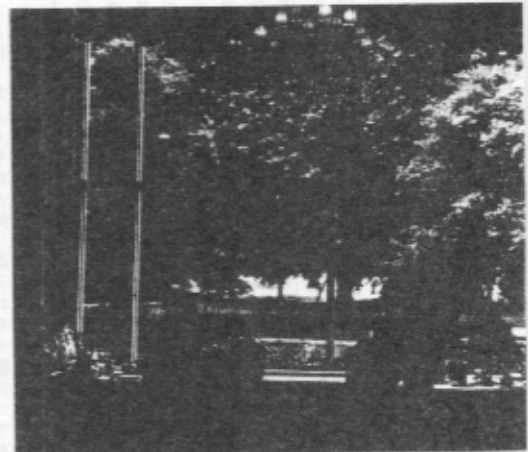


南窗屏風 (部分)
 南窗文化館蔵





ヤカンにティー・ポットを近づけて湯を注いでいる。沸きたての熱湯を使うのがおいしい紅茶の大原則だ。



一流ホテルのアフタヌーン・ティーを楽しむには、それ相応のエチケットを心得ておいた方がいい。(写真はハイド・パーク・ホテル)。

紅茶好き。イギリス人のこだわり。

荒木安正一文
text by Yasumasa Arai

生涯に8万杯もの紅茶を飲むイギリス人

生涯に8万杯もの紅茶を飲むイギリス人。平均2・6キロ。一生涯に8・9万杯。彼らのティーは圧倒的に紅茶であり、相対的に濃い紅茶を淹れてたっぷりのミルクを加える。お茶好きを自認する日本人が平均して一年間に飲む緑茶、紅茶、烏龍茶の合計約1キロのおよそ3倍である。

彼らのティーは朝の目覚めの一杯に始まり、朝食時、午前中の休憩（11時前後なのでイレヴンジズという）、昼食後、午後の休憩、帰

宅して、そして夕食後に、さらには寝る前に、と延々と続く。これらに加えて休日や特別の日などに、社交や親睦の目的で、心のこもった伝統の「アフタヌーン・ティー（午後のお茶会）」を楽しむ。時代が移り変わり、コーヒーや多種のソフトドリンクが進出するなかで、ここまでのスタイルを保つ彼らの姿はまさに「お茶好き」以外の何者でもない。

ミルクとティー、どちらを先に入れますか。

独特の階級社会であるイギリス人のティーの飲み方にも「こだわり」があり、それなりの作法や流儀が現存し、互いに譲りはしない。一般の人々の習慣では、カップの中にミルクを先に入れておいて、上から茶を注ぐのが普通である。こうすればカップの底に茶漬がつきにくいとか、薄手のカップが高温の茶を注いでも割れにくいとかこの方法が絶対に美味であるとかの理屈がある。

また、かつて深刻なミルク不足時代があり、下級の茶をミルクに加えることにより欲求を満たしたとの歴史的論証もある。しかし、家庭で日常使用する茶の銘柄や品質をいつも決めている場合は、茶の淹れ方も手順も常に一定にしていて、ミルクの分量も目分量で先に入れておくことはとても合理的であった。

他方、17世紀後半の宮廷で、「緑茶の文化」からスタートした貴族・上流階級の場合は、砂糖やミルクを添加する習慣が後から追加されたものだし、客人のもてなしに必ず多品種の茶葉を用意して、いちいち客人の好みの濃さに加減したり、ミルクなどを加えたりしたのであるから、当然ミルクは後からということになる。しかし、いざそれが正論であるかの結論はイギリス国内でも出されてはいない。

モーニングティーは妻への愛情表現

朝、起き抜けに飲む一杯の紅茶（ベッド・ティー）の習慣も、毎日とは言えないにせよ夫が淹れて妻のベッドサイドに運ぶもので、かつてアングロサクソン系の中流以上の家庭で早朝召使にさせていたことを、今は夫が代行している。労働者たちには早朝出勤の後、職場で簡単な朝食が出された時代の名残である。これは夫の妻に対する愛情表現の一つであり、男性の義務の一部でもある。

さて、紅茶の命は何と言っても味と香り。それを引き出すには水湯の温度が重要である。イギリス人の家庭の主婦は、紅茶が彼らのライフスタイルの一部となつてしまっているために、紅茶をうまく淹れることは当たり前のことで、とやかく言ったり深く考えたりはしない。忙しい朝や、不精な單身

者、オフィスでの休憩時などを除いて「ティーといえばポットさんとの共同作業のこと」であり、葉茶であろうとティー・バッグであろうと必ずティー・ポットを使う。これは味と香りを十分に引き出すためのコツなのである。

アフタヌーン・ティーはできるだけ優雅に

さらに、紅茶をおいしく淹れるためには「地獄のお湯ほどにグラグラ煮立った熱湯を使うこと」である。ヨーロッパの大陸諸国にみられるような「生ぬるい湯」は絶対に許されない。そのためにはティー・ポットをヤカンのそばに持つていくべきであり、ヤカンをティー・ポットのそばまで運ぶべきではないとされる。徹底したこだわりが現れている。

さらに、「午後のお茶会」に客人を招く場合の原則は、まず正しく淹れた紅茶と、多種類のお茶うけの食べ物とを用意して、その家庭で最も大切にしている、最も優雅さの演出できる茶道具を使用するのでなければならぬ。これこそがイギリス流の心のこもったおもてなしなのである。

このようにして、身分や階級に関係なく、それぞれのライフスタイルの中で、古き良き時代のイギリスの伝統が、簡素化されたとはいえ、今日まで引き継がれているのである。⑤



パレレンの見た「茶の湯」

① イエズス会司祭ルイス・フロイスの『日欧文化比較』『日本史』より

我々の間では日常飲む水は、冷たく澄んだものでなくてはならない。日本人は熱く、そして茶の粉を入れて、竹の刷毛(はけ)で攪拌(かくはん)することが必要とされる。我々は宝石や金、銀を宝物とする。日本人は古い釜や、古いヒビ割れた陶器、土製の器を宝物とする。

上流の富裕な日本人には、彼らが大いに好意を示そうとする客がある時には、別れ際に彼らの親愛のしるしとして、彼らが持っている宝を見せることが習慣になっています。それは皆必要な道具がそろった器で、彼らはそれから粉末にした葉を飲みますが、それは茶というもので、飲み慣れた者には味がよければ足りなく、健康を増進させるものです。

それを飲む時に使う物は皆日本の至宝で、ちょうど我々の場合ならば、指輪や、宝石や、たいそう高価な首飾りや、真珠や、ルビーや、ダイヤモンドを持つているのと等しく、その売買にあたって、宝石商のような者がいます。

この茶に人を招き、その席で器物を見せるために、まずその力に依りて裏を開きます。この裏が催される場所は、この茶会のためだけに人が入る特別の部屋で、その清潔さ、調度、整然とした配置を見るのは、全く驚くばかりです。

② イエズス会巡察使ヴァリニャーノの『日本巡察記』より

茶の湯に用いる容器は、いかにしても信じられないほど彼らの間で珍重される。我々から見れば、まったく笑い物で、何の価値もない茶釜一個、五徳(茶釜をのせる鉄製の台座)一個、茶碗一個、あるいは茶入れ一個で、三千、四千、六千ドゥカード、さらにそれ以上の価格の物がある。ドン・フランシスコ大友(九州の大名)が彼の所持する茶入れを私に見せたことがある。それは実際のところ、我々から見れば鳥かごに入れて鳥に水を与えること以外には何の役にも立たない物であるが、彼はこれを九千両、すなわち一万四千ドゥカードで購入した。

きわめて驚くべきことは、たとえそれと同じ茶入れを千個作っても、日本人の間では我々が考えるのと同じように何の価値もないことである。なぜならば彼らによって珍重されている品は、昔のある名人が製作したものでなければならぬのであって、彼らは千個の中から直ちに本物を見分ける眼識を持っているからである。それはちょうど我々の間で、本物と偽物の宝石を貴金属商が判別するのと同様である。ヨーロッパ人には何びとにも茶器の鑑別は不可能であろうと思われる。我々はいかによく見ても、どこにその価値があるのか、何に差異があるのか知ることはできない。

物質そのものに何の価値もないそれらの品に、なぜかかる大金を払うのかと私が日本人に尋ねると、彼らはヨーロッパ人が大金を出してダイヤモンドやルビーを買うのと同じ理由からだと答える。日本人は宝石の価格について少なからず驚歎し、ヨーロッパ人が宝石に多額の金銭を支出するのは愚かなことであると非難する。日本人が購入して珍重するものは何かの役に立つものであって、まったく何の役にも立たない小石を買おうとするヨーロッパ人の考えよりは、日本人が茶器に多額の金を支出しようとするの方が非難すべき理由は少ない、と言う。

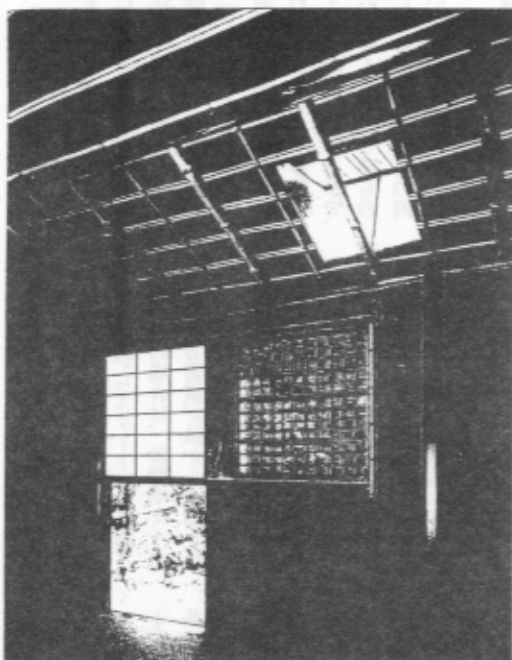
③ イエズス会通辞(つうじ)通訳)ロドリゲスの『日本教会史』より

新しい茶の湯の様式は、有名で富裕な堺の都市に始まった。この都市は主要な商業の中心地で、日本中でいちばん商業が盛んに行なわれている。市民はすぐぶる富み栄えていた。茶の湯に精通した堺のある人々は、何本かの小さな樹木をわざわざ植えて、それに囲まれた小さな茶の家を作った。そこでは、狭い場所の許すかぎり、人里離れて住む隠遁者の草庵を真似て、自然の事象やその根本について思索することに専念していた。そこは日本人が郷愁にふける場所になり、特に政務にたずさわる者、あるいは都市の雑踏の中で暮らす者のお気に入りの場所でもある。

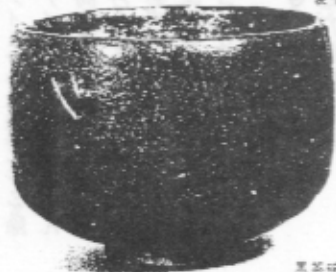
この都市にある小さな茶の家に人々は、互いに茶に招待し合い、都市の周囲にさわやかな隠遁の場所のないことの代わりとした。むしろある点では、彼らはこの様式が純粋の隠遁にまさるものとみなされている。そこで都市の中でそれを発見し楽しむことを、彼らの言葉で「xichu no sankio」という。これは、ブラザ(広場)の中に見出だされる静寂という意味である。

そこで用いられる道具は、見た目には貧弱なものであるが、価格の上ではきわめて豪華であって、二万、三万、四万両を超える器物がある。茶の家で使うものは、常に優秀さを表面に見せようとはせず、光沢や技巧も示さないようにし、ただ単純で素朴な自然の純粋さを示そうとする。それらは、金がかかったものであればあるほど、外観にはあまり表わさないのが、いつそう適しているといえる。

こうしたところから、茶の湯では、あらゆる種類の人工的なもの、華麗なもの、すべての見せかけ、偽善、および外面的装飾を大いに嫌うようになる。それを彼らの言葉で「keifacu」といい、例えば、あいさつに口数の多い偽りの言葉、贅辞、目上の人に対する追従、知ったかぶり、自分の力量以上のことを見せたがる欲望などのことをいうのである。



茶千家「又隠」内観



黒茶碗 銘「大黒」 長次郎作